(第3種郵便物認可)

(第3種郵便物認可)

この国に生きて

子供を通じて町にかかわる

理想の教育観抱き

山田 貴子さん(48歳)
辻 充子さん(49歳)

吉岡 忍

代表の山田貴子さんとは「アハハッ」と笑う。事務局長の辻充子さんは「クスッ」と笑う。いつも一事件が起きるフリースペースには、いちいち気にして

なんかいられない。雨が降っても風が吹いても、きっと晴れる日がくる。だから-〈天気村〉。

JR琵琶湖線の草津駅で降り、水の干上がった蔵津川の土手を歩いていくと、桜の古木の下に「フィールドワークショップ天気村」の木製看板があった。ぶっつで、古い。「コーヒー」と「日替りランチ」とある。あたりは河川敷と静かな住宅街。こんなところに喫茶店なんかあるんだろうか?

「アハハッ。以前は「オウムの施設じゃないか」って思われたりした。バイクの子〔暴走族〕が京都に向かう前に、コーヒーを飲んでいったり。あの子たち、ここではほんとに素直なの。そりゃそうよね、いま茶髪にしてる子だって、私たちがおしめを替えてやったんだもの」

一九八〇年代中盤の三年間、山田は滋賀県の中学教師だった。偏差値教育が浸透した学校では先生も生徒もおとなしく、熱気がなかった。子どもは多種多様な人間とのかかわりのなかで、たくさんの冒険と失敗をくり返しながら育つのではないか。そんな教育観を抱いていた彼女は結婚した。

「じゃ、自分で作るしかない。そう思った」

山田が教師を辞め、借金をし、親から譲り受けた土地に喫茶店兼フリースペースの〈天気村〉を開設したのが八七年。ダンスや演劇やオペラの愛好者の練習場に使われるうちに、分野を超えたコラボレーション公演も実現した。三年後、辻が事務局長役で加わってきた。

〈天気村〉のもうひとつの活動の軸は、保育園だ。でも、ここには時間割も行事日程もない。子どもたちは田植えもすれば、山登りもする。琵琶湖で魚を捕れば、煮魚にするための新聞紙もする。食器が必要なら、信楽まで土を取りにいって、陶器作りもする。そうやって知り合った老人ホームから、桜が咲いたと電話があれば、みんなで花見に出かけ、うろうろしているおばあさんを見つけると、手をつないで、徘徊をたちまち散歩に変えてしまう。「いつも何かが起きている保育園」、それが理想だという。

辻が言った。

「私たち、何をやっているんだろうと思っていたんですよ。遊んでいるように見えても実は、ボランティアっていうほど肩肘張っていなくて、みんな笑っている。九九年にNPO〔民間非営利団体〕になって、「あ、これまでやってきたことがNPOだったんだ」って、やっと腑に落ちたみたい」

いま専属スタッフは七人いるが、近所の大学の学生たちも手伝いにくる。開設当初に通ってきた園児たちもいい若者になって、手伝いにきてくれる。彼らは「子どものとき、連れていってもらったきれいな川が濁ってきた」と言い、独自に環境問題の活動をはじめたりする。

「昔は地域社会が子どもたちをみていたけれど、いま彼らにかかわっていけるのは私たちのようなNPOかもしれない」

十八年間をふり返ってつぶやく二人の言葉に、実感がこもっている。

(ノンフィクション作家・写真も)=敬称略

【連絡先】〒525-0033 滋賀県草津市東草津1-10-15 子どもネットワークセンター・天気村(電話)077-564-7868

吉岡忍さんの「この国に生きて」は今回で終わり、次回から